

「化学工学年鑑2015」の発刊にあたり

松 田 一 夫*

本年も化学工学誌10月号で年鑑をお届けします。年鑑の発行は、1998年から続いています。年鑑とは、化学工学会に属し活動する基盤技術分野6部会と展開技術分野8部会の合計14部会が、過去一年間を振り返って、「国内外の動き」、「研究・技術動向」、「今後の展望」を紹介するものです。これら部会からの記事の前段に、「化学工学一般」のページを設けて、化学産業界、教育、研究の動向など全体の動きを紹介します。この年鑑により、読者は化学工学の全分野における最新動向や情報が見て取れると思います。そして各記事の文末にある執筆者名から判るように、大変多くの方々に原稿を担当して頂きました。執筆者の方々には厚く御礼申し上げます。

さて、私はこの4月から濱村前編集委員長の後任として、本誌の編集を担当しています。編集委員会の活動内容を簡単に紹介します。まず、編集方針を策定しました。前編集委員会で策定した6つの項目は基本的に踏襲した上で、新たに「アジアとの連携に関する情報発信」の項を加えました。これは、化学工学会に参加する研究機関は、日々研究をおこない、その成果を学会発表や論文発表していますが、最近のキーワードである「グローバル化」と言う考えへの対応はどうなっているかを知りたいと思いました。すなわち、海外の研究機関との交流や共同研究などの連携の状況を紹介した方が良くと考えました。海外研究機関との国際共著論文は、その引用回数が多くなるとの指摘がありますことから、海外研究機関との連携は重要であり、まずは近隣のアジアとの連携状況をお互いに紹介しようと考えました。この方針案は5月に開催した合宿形式の編集委員会で討議し、確認しました。その場で、記事の切り口として、国際共同研究だけでなく、留学生受け入れによる人材交流も考えられる、文化の違いによる失敗談の紹介もあって良いなどなど。また、一回だけの特集記事で終わるのではなく長く続ける連載記事が適しているという、多数のアイデアや意見が出てきました。今後、この方針書に沿って、特集や連載記事などが組まれていきますので、お楽しみにお待ちください。

次に編集委員会の構成を紹介します。3つの分科会があり、大学など研究機関から30名、民間企業から16名、合計46名が参加しています。これに編集委員長と副委員長2名が加わります。編集委員会では各分科会に分かれて、新たな特集内容や連載記事の内容を討議します。ここでは、研究機関からは最先端の研究動向やそれに関して収集した

情報が提供されます。これに対して、民間企業からの関心や考え方が交差し、新たな特集案の内容策定へと進みます。大学からは大学院生が少数ですが参加しており、新鮮な発想で議論に加わっています。また年鑑編集分科会があります。これは3分科会の委員から兼任で対応して頂いてい



ます。編集委員会の様子を見ると、多様な人たちが参加しているお蔭で、常に新しい情報、話題、関心事が出てきます。このことは前任の編集委員長から聞いていましたが、まさにその通りです。最前線で研究や企業活動されている方たちならではのと思います。

年鑑自身に話を戻すと、編集委員会で議論すると、年鑑向けの原稿を担当執筆する各部会において、部会に属する細目の技術の位置づけについて見直しが始まっていることが判りました。時の流れとともに、技術も進化、変化しているので、年鑑の各部会が紹介する技術内容が変化していくと思います。また、「年鑑で示す事事情報は、過去一年間のレビューである、最近の研究の方向性をもっと判りやすく」との声があり、編集委員会としても改善の余地ありと判断しました。その結果、各部会からの記事の文末に引用文献の欄に着目しました。この引用文献にそれぞれタイトルを追記することで内容が明示できると考えました。将来は、年鑑が毎年10月に発刊されるという機能を利用して、各部会から最近の興味ある論文や研究の方向性を示す話題をまとめて紹介する電話帳のようなDirectoryのコーナーを設けたいとも考えています。

編集委員会では、自分たちがまとめた特集記事に対する読者からの評判が気になる、知りたいとの声がありました。評判を把握するのは、読者からの生の声をアンケートで寄せて頂くのが最も効果的です。アンケートを回答しやすくする、回答数を増やすにはどうしたらよいかを、先の合宿で討議しました。新たな回答方式を現在、検討していますので、化学工学誌を開いて、「アンケートのお願い」のページを見たら、奮って回答を寄せて頂けますようお願いいたします。読者の声が編集委員の活力の種になります。

平成27年度年鑑編集WG

安部道玄(東京工業大学)、長田光正(信州大学)、橋爪 進(名古屋大学)、原 伸生(産総研)、森 伸介(東京工業大学)

*千代田化工建設(株) 上席専門長、平成27、28年度化工誌編集委員長